慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一七八九年に於けるフランスの第三階級
Sub Title	
Author	小泉, 順三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1929
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.5 (1929. 5) ,p.720(78)- 765(123)
JaLC DOI	10.14991/001.19290501-0078
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19290501-0078

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一七八九年に於けるフランスの第三階級

小泉順三

一　序
二　新興勢力と王
三　財政窮乏と國民議會
四　第三階級の成立
五　セイエースの第三階級とは何ぞや
六　新貴族と大資本家の位置
七　第三階級の特權排擊と要求
八　第三階級の貴族化的傾向
九　結　論

一　序

J. Jaurès は云ふ、

「フランス革命は、間接に、プロレタリア階級の到來を準備した。それは、社會主義の二つの根本條件を實現した。民主主義と資本主義とである。然し、それは、實に、ブルジョア階級の政治的即位であつた」と（註一）。

今日、フランス革命を以つて、Voltaire & Rousseau 及國民議會に於ける演說者 Mirabeau, Robespierre 等の作であると認める人は恐らくないであらう。然し、Jaurès のこの斷定を快く承認するためには、次の三つの事を證明しなければならぬ。

第一に、フランス革命の中心的原動力は、第三階級、特にブルジョア階級であつた事、

第二に、哲學者、文學者は、この中心的原動力に理論的體系を與へた事、

第三に、第四階級、今日のプロレタリアに相當する者は、未だこの原動力となる迄に發展を遂げてゐなかつた事、

この三つである。

私は、この中の最初のものについて、フランス革命の原因は、ブルジョア階級を中心とした第三階級の希望の具體化に存してゐるのであつて、當時の第四階級及第三階級の最下部に屬する者は、何れも最も多く苦むではゐたが、未だ第四階級的意識を構成するには至らず、第四階級的分子と見らるべき農民中のプロレタリヤ、都市の手工業的プロレタリヤは、時折にはブルジョア階級に反對の色を見せては居つたが、全體的に云へば、全く第三階級の中に混入融和して居つた事を敍述しやうと思ふ。

一體、第三階級と云へば、貴族僧侶等の特權に對して、非特權階級即平民を總稱した言葉であるから、その中には、職業から云へば文學者、藝術家、法律家、敎師、銀行家、商工業者、醫師及技

藝家、農民等を、又經濟上から見れば、最も富める銀行家から赤貧の農夫或は、街頭の乞丐に至る迄包含されてゐる譯である。然し、こゝでは、既述した目的に從つて、第三階級とは、特に、ブルジョア階級を指すものとする。

（註一）Jean Jaurès, Histoire Socialiste de la Révolution Française Tome première p. 19.

二　新興勢力と王

一つの革命が勃發するためには、劣等階級が恐ろしい不幸に苦しめられるか、或は、大なる壓迫に惱まされてゐる事が必要であるが、それと同時に、彼等の潜勢力が地上に萠える事、彼等に向上に對する希望の萠芽がなければならぬ。

十八世紀末のフランス社會には、この二要素が確かに準備されて居つた。一方に於て、貴族僧侶は土地の三分の一以上を占有し、一切の義務及一切の租稅を免除され、一切の重荷を農民及都市のブルジョア階級の上に投げかけ、彼等に甚だしい損害を與へて居つたが、他方、此等被壓迫者階級はそれを反撥しうる丈の勢力を隱然たる中に養つて居つたのである。多數の勤勉なる小農民有產者が農村に存在して居つたと云ふ事實がそれである。苛酷な行政にも拘らず、農村には多數の貯蓄が隱匿されて居つた。すべての農村の小さき有產者は、これを自己解放の資として、僧侶貴族の大なる領地の一片を買ふ日の來るのを俟つて居つた。又、二世紀に亘る工業的商業的金融的發展によつて膨脹したブルジョア階級は、單に經濟方面に於て特權階級に對抗したばかりでなく、土地買取によつて農村に迄入り込み、農業方面に於ても貴族及教會と鬪爭の狀態にあることを明かに自覺して居つた。第三階級のこの狀態を評して、Jaurès は「彼等は社會の全表面を蔽はんとする自己の力を自覺して居つた」と云つてゐる（註一）。

故に、革命の到來には根强い根據があつたのではあるが、若し、王位者が、最高の俗世權力であり、又當時尙人民の尊敬を受けて居つた王位者が、この新興勢力の指圖をとり得たならば、革命的變革は何等の擾亂を見ずして恐らく成就し得たかもしれなかつた。故に Jaurès は云ふ「自由なる王ならば、ブルジョア階級及農民階級の中に、フロンド時代に於ける貴族の蜂起にも、リーグ時代に於ける舊教徒の一揆にも劣らぬ程の測知せられぬ勢力を發見し得たであらうに」と（註二）。然し、フランスの王位は自由なものでなかつた。僧侶と貴族とに深い因緣を有して居つた王は、かゝる事態に自由にして冷靜な觀察を下し得なかつた。從つて、王が王位を救ふため、又特權階級の貪欲によつて掘り下げられた缺陷を滿すために、國民に訴へんと試みたのは、彼として正當な策であつたが、その時に一つの大なる錯誤を犯して居つた。何故かなれば、彼は、王位を救ふと同時に、社會的缺陷の根源たる特權階級迄救ひたいと思つて居つたからである。しかも、彼はこの矛盾に殆んど氣づひて居らなかつた。

王を亡すものは、當然、この矛盾した且慘めな政策の結果でなければならなかつた。果して王のかゝる矛盾した態度は、あらゆる方面に於て、醫しうべかりしものを悉く醫しうべからざるものにしてしまつたのである。

（註一）二　Jean Jaurès; op. cit. p. 64.

三　財政窮乏と國民議會

五十年以來、王位は不斷に其財政狀態によつて脅かされて居つた。王の有する收支決算表には、殆んど常に不足した數字が示されて居つた。オーストリヤ繼承戰役、七年戰爭、アメリカの獨立援助等が、中央集權的國家及消費者然たる宮庭の普通に增大して行く費用の外に、異常な永久的出費を附加した結果は、隱す所なく收支決算表に現れたのである。從つて、君主政治は、無理算段の金策によつて、即ち公債によつて、あらゆる階級の官職の賣却を增加する事によつて、日附繰上によつて、翌年の租稅收入に對して收稅請負人からの借入等によつて、辛うじて維持されて居つた。デイッケンスの「二都物語」から言葉を藉りて來れば「概して心靈的な事柄では、楯と三叉槍をもつたその姉妹程に惠まれてゐなかつたフランスは、紙幣をつくつて、それを消費しつゝ國運の下り坂を威勢よく滑つて居た」のである。

然し、一七八九年に於てはすべてかゝる手段は盡き果てゝ了つて、王位は財政的終局點に立つて居つた。そこで、Etats Généraux を召集して之を國民全體に諮る事が絕對に必要となつた。Turgot, Necker 等は、既にこの Etats Généraux への一階梯として Assemblée provinciale なるものを主張して居つた。此れを歷史に於て見ると、Etats Généraux は一度ならず異常な危急時に於て王を助け、王の財政の均衡を簡單に確保した後、社會組織には全然觸れないで立去つてゐるのである。國家の危急に對して Etats Généraux が要求されるには、かゝる歷史的理由がフランス人の腦裡に同想されたからであつた。事實、若し革命の雰圍氣が全く無かつたならば、社會的變革を伴はずに、それは、この財政的缺乏を救ひ得たのである。

然し、今は事情がこれを許さない。一七八九年には、財政上の弊害は甚だ根深く、又甚だ慢性になつて居たからして、世人は、貴族僧侶の課稅上の特權に指を觸れないでこれを治療し得なかつた。但し、これとても、收支均衡以外の目的を國民が有して居なかつたならば、この接觸程度も甚だ制限されたもので濟んだであらうとは充分推定出來る。又當時の特權者階級も、かゝる程度の讓步ならば左した異議も差挾まぬ寬容は持つて居つたと思はれる。

Necker が一七八九年五月五日に、Etats Généraux で國家の財政狀態を示した時、彼は五千六百萬リーブルの不足を自認してゐる。然し、これは單なる收支の間の差であつて、財政上の最も重要な弱點ではなかつた。もつと重大な事はこの不足は將來への喰込を示してゐると云ふ事であつた。一七八九年の五月の國庫は、日附繰上の形式によつて一七九〇年の收入九千萬リーブル及一七八九年の最後の八ヶ月の內金として一億七千二百萬リーブルを豫め消費して居つたのである。

然し、前述した通り、單に財政回復のみが目的であつたならば、事態は重大ではあつたが、財政狀態自體は回復し得ないものではなかつた。こゝに至る迄殆んど何物も支拂つてゐない二階級に、年々八千萬リーブルの獻金を要求し、彼等が憎惡の的にして居つた僧侶から、その廣大な領地の產物を約五百萬リーブル獲得する丈で充分であつた(註一)。

Etats Généraux の最初の會合から、過激なる溫和派 (Ultra-modérés) が推したのはこの計畫であつた。この計畫は、特に Malouet によつて推敲され、同時に右翼の人々によつて、又左翼の革命

論者によつて採用される樣に論じ盡くされて居つたものである。本來、この計畫は實行不可能なものではなかつた。この計畫が實行されたとしても、特權階級は依然として社會的優越を維持し得るから、これは、彼等によつて疑もなく承諾されうる性質を充分に有して居つた。又、ブルジョア階級から云つても、財政の均衡の建直と云ふ事は、國家の全部的或は部分的破產とは異つて、國家の債權者に、即ち、王によつて契約された四十億五千萬と云ふ莫大な債務を債權として分有してゐる全公債所有者に確實な保證を與ふるものであつた。「故に、若し、これら過激溫和派、革命的保守主義者と呼ぶことの出來る人々の計畫が達成されて居つたならば、革命は自ら制限されて、甚だ穩和な財政事務に、又王國の會計の一矯正に止つたであらう」（註二）。

然らば、革命がこの安全なるプログラムを越え、しかく莫大なる奮激を持つに至つたのは何故であるか。革命が、當初に解決せんとして居つた單純な財政問題を越えて、しかく猛烈に突進して行つた理由は那邊にあるのか。

Etats-Généraux の急激なる方向轉換に我々は驚駭を感じる。それは財政回復のために王によつて召集された。そして數字にのみ注意するならば、この甚だ穩當なる努力は、貴族僧侶及封建社會の基礎を何等動搖さす事なく、そこで滿足されると思はれた。然るに何ぞ計らん。この Etats-Généraux そのものこそ、殆んど不可測な、しかも世界を動搖せしめる運動の鎖を解かんとするものであり、對貴族僧侶の鬪爭の幕を切つて落し、初めは卑めて居つた王政自體をも、間もなく殺害し、過去の特權や權力の上に、人權及市民權の光榮ある宣言を宣布し、デモクラシーに對しては歷史の大道を開らき、ブルジョア階級の全勞力に保證を與へ、且プロレタリアの到來を豫告するものであつた。

Jaurès はこの時勢を評し、且その理由を求めて云ふ、

「最初に天空のみを暗らくして居つた雲は、突如として擴がり、全く地平線を蔽ひ、山といはず、木と云はず、さては敎會の雲に聳ゆる鐘樓、城の高樓を雷擊し、その轟、その雷光は眠れる人々を呼起し、かくして、歷史的狂瀾の一世紀を、全く其無數の閃光の下に消して了ふに至つたのは何故であるか」と（註三）。

この巨大なる運動、この突然の狂亂を說明するのに、特權者の愚劣なる拒否を以てする丈では正しく充分でない。

特權者が、王政の收支を建直す事の出來たこの金錢的犧牲を、進んで第一に提供する、決斷と明智とを缺いて居つたと云ふ事は事實である。然し、同時に彼等も、財務的讓步丈で、生れ出でんとしてゐる革命を和らげ得ないだらうと云ふ事、革命は最初から、他のものを欲求して居つた事、そして、革命の心臟には奇怪なる激情が漲り、革命の眼差には、妄想と果斷の閃があつたといふ事を知悉して居つたのである。當時に於ける民衆の要求が、單なる金錢的租稅的讓步でなかつた事は、第三階級の代表者たる Sieyès がこれを立證してゐる。

彼曰く、「余は、貴族が王に次の樣な事を云ふに對して異存を挾むものではない。『陛下、陛下は陛下の財政を確立するためにのみ國會が必要なので御座います。ですから、我々は第三階級と同樣に支拂ふことに致しませう。その代りに、この餘剩が陛下以上に我々を脅かす會議から我々を免がら

せ得ないかどうか考へて下さい』と。然しながら、貴族がこの種の見解を抱くと云ふことは、……吾人は、寧ろ、貴族が第三階級を錯覺に陷れんとする意思でないかと疑ふことが出來る。……特權者流は、一度右の金錢上の例外さへ捨て去つたならば、其瞬間から階級相互間に於ける凡ての關係が平等であると繰返すのである。が敢へて問ふ。貴族が彼等に割充てられた租稅の分擔額を納付する丈で、フランスに於けるあらゆる種類の弊害が根絶されうることを保證する樣な奇蹟的權力は一體どこに存するか。租稅問題とは獨立に、今尙、惡弊と無秩序が存在してゐるとすれば、此惡弊を利用する人とそれに苦しむ人との間に如何にして凡てが平等でありうるか、一つ說明していたゞきたいものである」と。

然らば今一度、この異常なる奮怒は何所から發生したか、又如何なる新勢力が人々をして地上に奮起せしめたのか。疑問を發して見やう。それは農民階級からだらうか、或はブルジョア階級からであらうか。

この前代未聞の跳躍をつくつたものは、決して、封建的租稅に呻吟してゐた農夫、收稅官吏によつて皮まで剝ぎとられた農夫の苦痛からではない事は確かである。第三階級の主要な構成部分であるこの農民階級については、別の所で論じて、この斷定を確證するつもりでゐるが、彼等農民は、ルイ十四世の治世の恐ろしい飢饉に際しても、短的な一揆を試み、無力な石を遠方から投げる程の力しか有して居なかつた。一揆の鎭定後、絞罪に處せられた農民等の骸骨は、道行く襤褸着の農夫達に早くも忘れられ、又恐らく嘲笑されながら、樫の枝に干からびて居つた。如何に狂暴であつても、短的な爆發性しか持たぬ農夫の動亂的本能は世を動かすには明白に不充分であつた。

然らば、恰も磁氣が、突然農民を束縛する鐵鎖を走り過ぎて彼等の心にでも感應した如く、一七八九年の農夫をして突如勃起せしめた者は何者であつたか。

この不可思議な光芒は、哲學とブルジョア階級の二要素から發せられたものであつた。十八世紀のフランスに於けるスフインクスたる Etats-Généraux の本體を說きあかすには、この二大要素を究明しなければならぬ。而も、この二者の中、後者の方が、フランス革命劇に於ては、前者よりも遙かに有用な役割を演じてゐる。Jaurès は革命の原因として哲學を論じた後、次の如き斷定を下してゐる。「然し、若し一大變革に利益をもち、而もそれを生成しうる一新社會階級が存在してゐなかつたならば、十八世紀のこの普遍的哲學全部も無力であつたろう」と（註四）。

註一　J. Jaurès, op. cit. p. 47.

註三　ibid, p. 48.

註四　ibid, p. 54

四　第三階級の成立

十八世紀に於て、第三階級、特に、ブルジョア階級の狀態に大なる變化が起つた。即ち、產業の進展に從つて、この有產階級が働き、製造し、交易し、儲け、蓄財した結果、產業の進步に比例して彼等は日日富を增加して行つた（註一）。この反面に於て、貴族の貧窮が、同じ比例で、著々其步を進めて行つたことは云ふまでもない。生產的な階級が增大するに伴つて、不生產的な階級が衰えて行

くのは社會進歩の法則であつて、權力と名譽を以つては犯すことが出來ないものであつた。從つて、或る貴族の如きは、自己の階級を顧みて暗然たると共に、この否定し難い事實を承認して次の如く告白してゐる。「貴族は特權を有してゐるに拘らず、毎日窮乏と破滅の淵に落ちつゝある。然るに第三階級は、彼等の財産を承繼いでゐる」と（註二）。

然らば、第三階級のこの隆盛は何時から初つたのであるか。

この企業、商業、投機事業、及財産の大發展は、それ以前から續いては居つたが、特に John Law 以後に初まるものであつた。第三階級勃興の因を開いた Law の經濟政策の結果を Montesquieu の諷刺を以つて現せば、一波斯人はかう書いた。「半年前に富んで居た凡ての人々は今窮乏の底にある。嘗つてパンを持たなかつた人々が、巨萬を擁してゐる。……かの外國人は、古着屋が古服の裏返しをする如く、國の上下を轉倒さした。成上りたる者にとりては、いかに切せざりし、いかに信じ得ざりし榮達なりしよ。神と雖も、かく速かに人々を無より引上げはしない。幾人の下男が、今その朋輩に侍かれてゐるが、恐らく明日は、その舊主人に侍かれることであらう」と（註三）。

これを數字に表せば、一七二〇年に一億六百萬、一七三五年に一億二千四百萬、而して、一七四八年に一億九千二百萬を數へた佛國の輸出額は、一七五五年には二億五千七百萬、一七七六年には三億九百萬、一七八八年には三億五千四百萬を數へるに至つた。一七八一年に Necker は「吾人は一年に二百萬の消費稅の增加を見越して可なり」と云つてゐる。

かくして形成された資本は何所へ行くのか。これは、先づ我々に起るべき疑問であつたが、この投資を双手をのばして要求して居つたものは、特にその筆頭をなすものは、外ならぬ國王其人、君主政自體、及それに隨伴する貴族であつた。

「悠久の昔から、牝牛の腹の中の犢を喰ひ、現年度から次年度の生産に迄喰込んでゐる」政府は、どうしても「富を生み、且つ貯ふる唯一の團體たる第三階級」から前貸を受けねば身を維持し得なかつた。それに、政府は、その體面によつて、四方八方の有力な第三階級から個人的にも借金する事が出來たのである。

然じ、政府が一般の債務者となるや否や、最早政治上の諸事件は、獨り王の占守する事項でなくなつて了ふことに注意しなければならぬ。前時代に於ては、個人の財産は其關係を國家財政の上に持つて居なかつたが、こゝに於ては事情が一變して了つた。前時代に於ては、一公共的罪惡であつた財政的失敗が、今では、幾千の家族に對する災害となつて現れるに至つた。しかも、政府に金錢的關係を有する者、換言すれば政府の公債を所有する者、政府の有給使用人たる者、政府との取引に思惑を行つてゐる人の數は、政府が窮迫すればする程增加して行つたのである。從つて、政府の苦しむところは債權者たる國民の苦しむところ、王の浪費は國民の破産を意味するに至つた。

然るに、常に歳入を超過する行政費に惱されて、爲す所を知らなかつた政府は、これに對して正當にして效果ある方策を施し得なかつた。政府はこれを矯正する方法として、公債の廢棄と云ふ切開手段—最も簡單ではあるが、國民全體にとつては最も不幸なる方法より外に持たなかつた。故に Tocqueville は云ふ、フランスの歴史は、賣却された王室財産が不讓渡物として回收されたり、與へ

られた權利や公契約が破棄蹂躙されたり、危機至る毎に一般債權者を犧牲に供し、濫りに社會信用を破壞した例に滿ちてゐると（註四）。かゝる危險な切開手術の經過は明白である。憤怒した第三階級は、一擧にして「政治家となり、同時に不滿家となり」、完全に二つの資格をかち得た。この切開手術には、巴里に廣壯な邸宅を構へ、君主政に深い緣故を有して居つた金融家、大資本家も流石に當惑したのである。そして、この當惑は、彼等に「有利な獨占のために彼等が繁榮してゐる制度を永續させたいが、大資本の投ぜられてゐる企業を、突然禁止する氣まぐれな且無責任な絕對權力、官僚政治の專制に警戒を弛められぬ」彼等の階級的地位を反省せしめるに充分なものであつた（註五）。

然し、政府の無定見は、第三階級に單に國家の債權者としての自覺を强要したに止まらなかつた。同時に、第三階級は、商人及製造業者としても、特權國家の反對者たるの資格を享有する事を强要される立場にあつた。第一に、陸海軍の高級地位が、道德的に又肉體的に明白に惰落してゐる貴族に留保されたがために、フランスの武力は外に向つて、益々無力となつた。この結果、十八世紀を通じて、フランスにとつて不利益な商業上の條件や、價値多い植民地の喪失を以つて局を結ばない戰爭は一つもなかつた。ユトレヒト（一七一八年）、アーヘン（一七四八年）、パリ（一七六三年）、ヴェルサイユ（一七八三年）の平和條約皆然りである。然るに、外交上の巧妙なる成功こそ、其國の外國貿易繁榮のための最も重要な前提條件の一つであつたのである。

次に、內に於ては、舊封建的障壁がしきりに商業を妨害した。各地方は各自一小國家の如き觀を呈し、種々の關係に於て、固有の法律、固有の行政を持ち、關稅の障壁によつて、他の部分から切離されて居た。其他、封建君主の地代權、市場權、橋梁關稅、道路關稅等は國內取引の自由を殆んど壓殺して居つた。日本や支那からフランスへ來た商品は海賊の群る廣大な荒海を越えてしても、その價格は僅か二三倍乃至四倍に騰貴するにすぎぬのに、オルレアン住民からボルドーに輸送せられた一定量のブドー酒は、途中に於ける課稅の結果、その値段は少くとも二十倍になつて居たと Louis Blanc は我々に報告してゐる。

故に、商業が强力な飛躍をなさんがためには、貴族の特權が倒されねばならず、海軍と陸軍とは改革されねばならず、王や封建諸侯が國內に於て徵發する關稅は撤廢されねばならなかつた。一言にして云へば「商業の利益は自由と平等とを要求したのである」（註六）。

商業手形の取引によつて今日のフランス銀行と同一の職務を司つて居つた La Caisse d'Escompte の如きも、幾度か廢止され再設されたりしたが、これは、常に國庫財政の危機に際して、暴力で借入を行つた大藏大臣のためであつた。

商業と同じく工業も亦古代制度によつて束縛を感じた。たが、古代制度は工業を壓迫しやうとしたのではなかつた。反對にそれに對して最高の好意を示したのである。同業組合が、其不愉快な競爭者たる資本主義的工業を出來る丈苦しめ又妨害したゝめ王等は特別に資本主義的工業を保護した。幼年期に於ける製造工業に對しては此方法は適して居つたかもしれないが、既に或る程度に進歩した工業、十八世紀の後半に入り急速に發達し初めてより高い段階に上つた資本主義的工業には、その保護は、反つて新投資を妨げる羈絆になつた。既に產業革命を完成しつゝあつた對岸の英國にフ

ランスが拮抗して行くがためには、一切の改良を同程度に同じ速度で採用して行かねばならなかつた。この意味に於て、同業組合的制限及官僚的保護規定の撤廢は、今や單に利潤の問題であるばかりでなく、資本主義的工業の死活問題となつて行つた。一七七六年 Turgot は先づこの撤廢を試みて失敗した。彼が失敗したのでなくて寧ろ、特權者が彼を失墜せしめたと云ふ方が適して居るだらう。大工業が政府に革命を要求するのも當然であつた。

偖て、當時の公債總額は何程に迄達して居つたかと云ふに、一七八九年に、Necker によつて Constituante に提出された表によれば、公債の額は四十四億六千七百萬に上つて居つた。此總額の外に終身年金は十億五千萬に及び、永久年金は十億二千萬に上つて居つた。そしてこの負債の起源や形式は何れにもあれ、それは手形或は債券によつて示されて居つた。

これについて、こゝに注意すべき事は、かゝる膨大な負債を國家が負擔して居る結果として、王國の最後の豫算にはブルジョア階級的豫算の本質的特長が現れて居つたといふ事である。即ち、王國の最後の豫算表には、其資源の半分が負債の償却に充てられ、毎年利子に充當される二億五千萬はフランスの全土地收益の十分の一に相當して居つた。借入、利子、元利支拂、かゝる言葉が其大部分を占めてゐる豫算表は、取も直さず資本主義の實行されてゐる社會にのみ存在するものと云はねばならぬ。一七八九年のフランスには資本主義は嚴然として存在して居つたのである。この事を更に適切な他の言葉で言表せば、ブルジョア階級は政治的に近世國家を横奪する前に、債權によつて豫め、財政的に近代國家の主となつて居つたのである。

但し、この財政的革命勢力である公債所有者の數は近似値的にすら數へる事は不可能であつた。Necker は Etats Généraux に提出した報告書に於て、公債の大部分は無記名で、あらゆる種類に分れてゐると云つてゐる。彼は、それからずつと後に、それを記名債券に書換へることを提議したが、この企は遺憾ながら實行されなかつた。若し、實行されて居つたならば、我々は事實に近い數を知ることが出來て甚だ興味深いものがあつた事と思ふ。

然し、我々は、其所有者が多數であつた事及其所有者は殆んど巴里に集つて居つた事といふ丈は想像出來る。何故その數が多數であつたと想定するかと云ふに、後述する如く、當時の大資本家金融家は、かゝる危險多き公債を全部自分達の手に引受ける程愚かでなかつた。彼等は其中一部分を其儘所有して、大部分はこれを、中及小のブルジョア階級に押つけて、危險を他に轉嫁する方法を熟知して居つたからである。又何故に彼等は殆んど巴里に集合して居つたものと論定するかと云ふに、社會信用そのものは、僻地僻村とまで云はなくても首府から甚だしく離れて居つた地方にまで宣傳され理解されるには餘りに近代的產物であつたから、愚直なる生活を特長として居つた當時のフランス社會に於ては、この種の信用が普及するには甚だ長い年月を必要とする譯であつたからである。加之、當時にあつては、今日の如く、國家の有價證券を遠地と取引し得る樣な金融機關は、アムステルダム、ヂェネバ及ハンブルグの樣な大都市を除いては、殆んど存在してゐなかつたと云つてよかつた。從つて、國家の債權者は殆んど巴里に集り、巴里は彼等にとつて、特に必要な都市、公債の首府であつたのである。そして、この現象は第三階級をして、自然に一大勢力を構成せしめ

て居つた。分散よりも集團をなしてゐる方が、彼等を强力な社會力とするにはより、必要な條件であつたのである。

同時代の觀察者はこれを明白に立證してゐる。ベネティアの大使は革命の最初の一週間から、彼の政府に破産の風聞は巴里に住んでゐる殆んどすべての公債所有者を激怒させたと書送つてゐる。Necker は、彼の財政施政表に於て、巴里は公債所有者の主要なる住居であると書いてゐる。Sieyés は、以上の言に裏書する如く、第三階級の要求は王國の最大都市の要求に外ならぬと斷言してゐる。

要之、巴里に於ける第三階級は公債所有によつて、一つの opposant たる地位に立つたのである。Jaurès は、第三階級の王政に對するこの立場は正しく今日の資本主義に對する無産者の立場に適用されると評してゐる。曰く「若し、無産階級が此の革命的國家主義を、町人階級の有閑的特權的部分に適用するならば、彼等は『我々のみが國民である』と云ふであらう」と(註七)。從つて、古代制度に對し怒を覺えてゐる人々は、自己の存在を確保するために新制度を要求してゐるこのブルジョア階級に於て、彼等の同盟すべき味方、代表として信賴するに足る首領を發見したのであつた。

たゞここで特に注意すべき點は、第一に、資本家、商人、製造業者、其他實業家或は金融業者と云へば、社會の中で最も保守的な階級であり、且、最も溫和なる政府の扶助者であり、又、自ら輕蔑し、或は嫌忌する法律に對してもよく耐え忍んで服從して行くものである。然るに、この階級がなべて、國民の他の部分より以上に、決定的に改革を企てるに至つた事、第二には、そうではあるが、彼等をしてこゝに至らしめた原因は主として經濟的であつたから、彼等が革命を決心したのは專ら財政方面であつた。從つて、初めは、政治的方面の改革を彼等は夢想さへしてゐなかつた事、この二つである。

然し、後の事情の推移は別問題として、第三階級が國民中第一の政治權力者となることは、既に定つた徑路を辿つて來て居つたのである。Marx をして云はしむれば、國家の財産に投資する事は、ブルジョア階級にとつては資本主義的反抗の第一手段であつたと同時に、國家に對するこの債權は、彼等の政治的發展の第一方法であつた。Masx の說は正しい。實に、古代制度は、金融家の後見の下に衰微し初め、資本への從屬のため破滅したのである。

Marx 及 Jaurès のこの見解に對して、H. Taine は稍〻見解を異にしてゐるが、彼が、その名著 "Les origines de la France contemporaine, l'ancien régime" に於ける、第三階級に對するこの見解は當を失してゐると云ふ非難を逃れることは出來ない。何故かなれば、彼はこの見解に於て、唯物史觀をとらずに觀念史觀に據つてゐるからである。

Jaurès は云ふ、彼は、其著「古代制度」の中で「社會の構成について」論じてゐる章で、ブルジョア階級を研究する事、又それを擧げる事すら全く等閑に附してゐる。彼は其道筋で辛うじて多くの破産した貴族は自己の領地をブルジョア階級に賣却したといふことを記してゐる。然し、どの部分に於ても、彼は二世紀以來のブルジョア階級の經濟的發展に意を注いで居らぬ。と、Jaurès の云ふ如く、事實 Taine は第三階級の發生發展について殆んど述べて居らぬ。然し全然述べて居らぬ譯ではない。第四篇の「理論の流布」の第三章の初めに、中流階級として、少しく其發展について述べ、

且 Sieyès の「第三階級とは何ぞや」から引用して第三階級の要求を略述してゐる。然し、この記述は、Jaurès の所謂、道筋で辛うじてそれに觸れたのであつて、結局、彼の云はんとする所は、Jaurès も云ふ如く、虚榮への接近、愚なる哲學心醉への接近によつて、第三階級は革命運動の旗頭になつたといふ結論であつた。彼の結論と覺しい箇所を引用すれば次の如くである。

「政府の完全なる不信用、ルソーの極端なる成功、この二つの同時の出來事を、我々は第三階級の哲學への歸依の日附とする事が出來る。……ルイ十六世の治世の初に、數年不在であつた後に歸國した一旅客は、國民の中にどんな變化が認められるかと人に問はれた時に、『サロンで話されて居つた事が街頭で反覆されてゐる事實を除いては別に何にもない』と答へた。――而もこの巷間で世人が反覆して居つたものは、即ち、弟子によつてあらゆる調子で、又あらゆる形式で敷衍され、通俗化され、反覆されたルソーの教養である……」と（註八）。

要之、小都市のブルジョア階級は、本心に於ては貴族の侮蔑を忍んでジャン・ジャックを讀んだ。そしてジャコバン黨となつて居つた。こゝに革命があると、彼は云つてゐるのである。

即ち、彼は純理哲學が全國民を熱狂奮起せしめ得た如く考へてゐる。そして、彼は、哲學の議論は抽象的である、古典的思想は空虚なものであると論じながらも、其哲學者達のみを實際家と稱して居つた。結局、彼は社會生活の本體を見誤つたからして、ブルジョア階級をして第一階級たらしめ、又彼等をして社會の指導者たることを餘儀なくせしめた、生産、勞働、貯蓄、商工業の進歩の偉大なる結果に無關心であつたと云ふ事が出來やう。Jaurès は最後に、「マルクスをよむか、又は少くともオウギュスタン、チェリーについて考へる事がライヌには甚だ缺けて居つたのである」と結論して、其論鋒を收めてゐる（註九）。

註一　H. Taine, Les origines de la France Contemporaine, Vol. II. (p. 22). p.165.
註二　De Tocqueville, L'Ancien Régime et la Revolution p. 103.
註三　Montesquieu, Lettre persanes. Lettre CXXXVIII.
註四　De Tocqueville. op. cit. p. 128.
註五　J. Jaurès. op. cit. p. 59.
註六　カツツキー著　フランス革命時代に於ける階級對立　五一頁。
註七　J. Jaurès. op. cit. p. 172.
註八　H. Taine, op. cit. p. 178-180.
註九　J. Jaurès, op. cit, p. 56.

H　Sieyès "Qu'est ce que le tiérs-état?"

然らば第三階級とは何か。

Immanuel Josephe Abbé Sieyès (1748-1836) は其著 "Qu' est ce que le tiérs-etat" に於て、これに對して最も明確な解答を與へた。

この著は一七八九年の一月に出版されてゐる。當時フランスの政府は、國家の窮乏を救はんために Etats généraux を召集する事を公布して居つたが、政府の破産が益々焦眉に迫ることを感得するや、しきりに其召集日を早めた。即ち王は一七八八年九月廿日に一七九二年七月を以つて Etats généraux を召集すべき旨を宣言したが、ついでこれを繰上げ一七九一年一月と

し、更に又、一七八九年五月一日に繰上げた。かくの如く政府は事態の急なるがためしきりその實施を急いだに拘らず、時の大藏大臣たるプリエンヌには Etats généraux 召集の尙確然たる意志を有してゐなかつたゝめ、これに臨む意見及成算に思ひ及んでゐなかつた。こゝに於て、彼は一七八八年七月五日の公文書を以つて、當代の學者文人に對し Etats généraux の召集に關しての忌憚なき意見の開陳を勸告した。前記 Sieyès の著もこの勸告に促されて書かれたものゝ一つであつた。この著はその中でも最も名聲を博し、オルレアン公の如きはこれを讀んで喝采措く所を知らなかつたと云はれてゐる。然し、其他數知れず出版された大少の諸著も、その所論には冷熱の差こそあれ、貴族僧侶の僭暴を憤る意氣に於ては Sieyès の著と異つてはゐなかつた。例へば、一七八八年の末に出版された、Jean Paul Robert-Saint-Étienne (1743-1793) の "La Considération sur les intérêts des tiers" には、「僧侶と貴族とを除くも國民は存在す。第三階級は自己のみにて完全な社會である。其他はすべて無用の贅物にすぎない。貴族は最早國家の主人たることを得ざるばかりでなく、辛うじて國民たりうるのみ」と論ぜられて居つた。

當時 Etats généraux について最も問題となつて居つたのは、その議決を階級によるか、議員の頭數によるかの一點であつた。前者によるとすれば、特權階級の勝利であり、後者によれば第三階級の戰勝に歸する譯であつた。Mignet はこの解決の何れかを重大視して「フランスの全將來は懸つて階級の分離が合同にあつた」と云つてゐる。Arthur Young も一七八九年六月八日に「現在すべての議論は一點にある。が然し、世論は余が豫期しうるより以上に分裂してゐる」と記してゐる。

第三階級のこれに對する主張は、然し、確定して居つた。第三階級は所謂三民議會を形成するを目的としない。目的とする所は國民議會を組織するにある。たとへ貴族僧侶が議決に加らないとしても、第三階級の代表者が、二十萬の貴族又は僧侶を除く全國民中、二千五百萬乃至二十六百萬人を代表するものであると云ふ事實は、第三階級の代表者をして國民議會を構成すると自稱せしめるにすら充分の理由がある。これが彼等の主張であつた。特權階級が參加しないならば、自己のみにて國民議會を成立せしめると云ふ果斷を有して居つた。そして、事實、信ずる如く實行したのである。Mignet が「Etats généraux は既に形成された革命を公言したにすぎなかつた」と云つたのはこの意味である。

この經路に於て、前記 Sieyès の「第三階級とは何ぞや」は、明白に、第三階級の本躰を我々に示したものである。

Sieyès は彼の證明せんとするものを六に分けた。第一に、第三階級とは何か。曰く總べてである。第二に、政治上に於ける第三階級の地位はこれまで如何なるものであつたか。曰く、零である。第三、第三階級は何物を要求するか。政治上に於て相當のものとなる事である。

この第三の問答は、更に次の三つの派生的說明事項に勢ひ言及する事を必要とする。

第四、第三階級のためなりと稱して、大官連が嘗つて試みた事柄、並に、特權者流がそれ自身で提案した事柄。第五、其當然なさねばならなかつたであらう事柄、第六、最後に、第三階級が其當然占むべき地位を得んがために爲すべく殘されてゐる事柄。

Sieyès は、以上の六回答に大膽なる說明を與へて、以つて、第三階級の何者たるかを宣言したのである。（註一）

第三階級とは何か。これに對するセイエースの答は簡明である。曰く、すべてであると。これを更に詳細に知らうとするならば、一國民が存續繁榮するために必要なる物は何んであるか考慮して見ればよい。

國民の存續繁榮に必要なるものは二つある。一つは個人的業務であり、一つは公共事務である。個人的事務は再分類すると四つに分れる。

一、農業に從事する凡ての家族によつて構成される所のもの、即ち農業である。

二、加工及製造勞働である。原料の最初の販賣から、その消費若しくは使用に至る迄に、新らしく加へられた手工の如く、自然の恩惠物に完全性を與へ、粗笨的生產物に二倍十倍百倍の價値を與へる種類の勞働がこれである。

三、生產と消費との中間、並に各種生產の段階の中間に介在するもの、商人と問屋とがこれである。問屋は、場所と時との欲望を比較商量して物品を運搬保管し、商人は、卸商、小賣商を不問、販賣によつて利を計るのであるから、この種の勞務は無論有用である。

四、前記三職業のみ、即ち最も尊重されてゐる學問上の職業や自由職業から、家庭の勞務に至る迄を包含してゐる。

以上四つの社會維持のために必要な職業を負擔してゐるものが第三階級である。其上に、社會周知の四名稱、即ち、劍、法服、敎會、行政に分類する事の出來る公共事務についても、第三階級は常に其の百分中九九を占めてゐる。しかも、その九九たるや、特權階級が行ふ事を拒んだ實に苦しい仕事のすべてであつたのである。

之に對して、特權階級は、人間の從事しうるあらゆる仕事から、前述した社會維持に必要なる職業及、多大の困苦を要する仕事を控除した殘部、即ち、名譽と利益を有し、且それに從事するに何等の心勞も必要とせぬ仕事を悉く獨占したのである。

然らば、特權階級は、眞にこの名譽ある安易なる地位を獨占する資格を有して居つたのかと云ふに、そうではなかつた。人間が或物を獨占するには、彼等が適任であるか、或は、他人にこれを與へることを拒絕するか、何れか一方法を選擇しなければならぬ。この場合に、彼等特權階級は、自己が適任であると主張する丈の自信も理由も全く所有してゐなかつたから、彼等は後者を選んで、第三階級がそれらの地位に就く事を禁じたのである。そして、彼等は自己の獨占を尊嚴づけるために、第三階級に對して侮辱を極めた言葉を與つた。曰く「汝等の貢獻は如何にせよ、又彼等の才能が如何にあるにもせよ、彼等はそこまでしか行けないのである。――それ以上に行つてはならないのである。彼等が尊敬されると云ふ事は良い事ではない」と。

獨占は、單に、其埒外に置かれたものを失望させるばかりではない。自由競爭なくして作出された工作品は、凡て値段ばかり高くて品質が惡い。獨占は、獨占者にとつては專制を意味し、獨占の圈外に立つ者には、搾取されることを意味する。フランスの貴族は、かゝる獨占者的性格と觀念に於ては完全無缺であつたのだ。

「モンセエニュールは、國事の總體について一つの眞に高尙な思想を有つて居た」と、Dickens は云ふ。「それは、あらゆるものに勝手な道を進ませて置けと云ふ事であつた。だが、個々の國事については、モンセエニュールはそれとは別の眞に高尙な思想をもつてゐた。それは、あらゆるものは彼のためにならなければならぬと云ふこと――彼自身の權力と私囊とを肥やすに都合のよいものとならなければならぬと云ふ事であつた。……彼の快樂については、一般的なものであると特殊的なものであるとを問はず、モンセエニュールは又別の眞に高尙な思想をもつて居つた。それは凡て世の中は自分の快樂のためにつくられたものであると云ふ事であつた。彼の經典にはかう書いてあつた。

（代名詞丈が原文と異つてゐるが、それは大したことではない）『モンセエニュール云ひけるは地とこれに充てるものは皆我物なり』と。」（註二）かかる觀念の横溢する所必ず、「何等有用の才能を持たず、獨立出來ぬ虚僞の國民が眞の國民に寄生木の様にとりつき、其樹液を絞り取り、その負擔となり、遂に、之を疲れさせ、枯死せしめるものである」（註三）。

故に、第三階級は云ふ、かゝる無用な特權階級を取除ても、國民はより少い或物になるのではなく、却つてより多い或物にならねばならぬ筈であると。何んとなれば、第三階級は個人的業務の一切と公共事務の九分九厘迄を遂行してゐると云ふ理由で、眞實に國民の凡でであると主張しうるのに、かゝる特殊の存在物があるために遺憾ながら、束縛され壓迫されてゐるすべてであると附言しなければならないからである。特權階級の存在しなかつた場合を想定して見ればよい。此の時にこそ、初めて、第三階級は全く自由に活々とした凡てになる。第三階級なくしては何事も行はれない。そして特權階級がなかつたら、尙一層都合よく萬事は運ばれる筈であるのだ。從つて、純粹に第三階級が全國民であるがためには、特權階級は國民にとつて有用でないばかりか、國民を弱め且害しうるにすぎぬものであること丈を示したのでは足りないのであつて、一歩進んで、貴族階級は國民の負擔にこそなれ、國民の一部を決して構成し得ないと云ふ實證を擧げて、大膽に彼等を排斥しなければならぬ。とセイエースは云ふ。

今、彼の貴族排擊を述べるに先立つて、第三階級中の特權階級的分子である大資本家的ブルジョアジー及新貴族は、第三階級に所屬すべきものか、又、は特權階級に所屬すべきものであるか、論考して見やう。

註一　セイエースの「第三階級とは何ぞや」は京都帝國大學法學論叢所載の近内金光氏の金譯による。（同雜誌第十五卷第五號、第六號及第十六卷第二號、第四號第六號）

註二　ディッケンズ「二都物語」柳田泉氏譯、一〇三頁。

註三　H. Taine, op. cit., p. 155.

六　新貴族と大資本家の位置

當時フランスには、大資本家的ブルジョア、或は金融家と稱する事の出來るものは既に存在して居つた。收稅請負人、大軍需品請負人、印度會社の大株主等の如きは、其代表的人物である。

そしてかくの如き第三階級の社會的出世は、一方に於て貴族をして、漸次第三階級に接近せしめると同時に、他方、第三階級の貴族への漸次的接近を促し、事實上の平等を權利としての平等に先立たせて居つたから、一七八九年近くに及んでは、彼等兩者を街頭に見分けるに困難を感ずるに至つて居つた。（註一）

兩者の階級的並行はたゞに彼等の私的生活にのみ顯著に現れたのではない。その社會生活に於て、一は資本による利得慾によつて、他は特權と政權とによる財政收拾策によつて、兩者は階級的並行から階級的提携關係に迄進んで居つたのである。

その第一にあぐべきものは、公債による債權債務の關係である。大ブルジョアは、最も重要な國家の債權者として、國家の破產を防ぎその收入を高め、支出を減少する改革を政府に迫るべき充分

の理由は、前述した如く、確かに有して居つた。然し、事實を云へば、その改革を最も希望したのは彼等でなく、寧ろ中小のブルジョアであつた。何んとなれば、國債證書の中、彼等は僅かに一部を保持したにすぎぬ。大部分はこれを公衆に對して、中位乃至は小資本家、特に利息生活者に對して高價に押つけ、公債引受に關する危險の轉嫁と云ふ重要な財政的手腕に堪能であつたからである。そして、反つて彼等は、かくの如き公債取引から直接又は間接に、利潤として豐富な收穫をあげた。恐らく、新公債の取引を無用ならしむる不足なき豫算をおこすと云ふ事より、彼等にとつてより不愉快なことはなかつたであらうと極言しても、彼等の心理狀態の描寫として決して過當ではないと思はれる。

その第二は、彼等の或者は、收稅を國家から請負ふておつた事である。

今日では、國家は稅を收稅官によつて直接に收納する。然し、古代制度に於ては國家は收稅を貸貸した。この結果、極端に富裕な且有力な收稅請負人の寡頭政治を國家の傍に樹立して居つた。彼等が收稅の請負によつて得た利益は、百萬を以つて、又千萬を以つて數へる事の出來る程莫大なものであつた。Dupin de Francueil の如きは六十萬リーヴルのレントを有し、巴里には Chenonceux と宏大な邸宅を有して居つた。この事實は、租稅請負なるものは國民搾取のために最も稔り多き方法であつた事を示すとともに、彼等の利害と第三階級全體の利益が明白に對立してゐる事を示すものであつた。

其他多くの點に就ても、工業資本家の決して少數でない部分が特權國家の維持に利益を有して居たといふ事も正しく事實であつた。何んとなれば、「商業と同じく、資本主義的工業も亦、其初期に於ては、主をして奢侈の要求に仕へた」からである。（註二）

要之、大ブルジョアが古代制度と深い關係を有ち、それから莫大な利益を得て居つた事は確實であつた。從つて、彼等を第三階級から除外するのが正しい樣に考へられ得る。然し、大ブルジョアと特權階級との交渉を他の一面から考察すれば、我々は、この新らしい金權貴族は不知不識の間に、自己の力丈で地主的特權階級を過去のものに葬り去りつゝあつたと云ふ事實を發見する。

彼等の出現は、劒の貴族をして第一階級、少くとも、唯一の社會的勢力たる事を停止せしめたのである。滅亡せんとする者が、自己の職務を遂行するために、明日は自分等に代るかもしれない新興勢力に救を求める事を餘儀なくされるのは常に衰退しつゝある社會の法則である。

古代制度は、いはゞ、資本に從屬したゝめに、金融家の後見の下に衰微し初めたのである。この意味に於て、彼等は確かに第三階級中の重要な革命的勢力であつた。故に、個人的に云つて、收稅請負人が古代制度に執着し且そこから莫大な利益を得て居つた事、及、十八世紀以來第三階級の忿怒が彼等に對して激烈の度を加へ、やがて後には、革命の潮が彼等を打倒すに至つたと云ふ事も、彼等が第三階級に所屬する事を少しも妨げるものではない。

彼等は、一言にして云へば、一新勢力として出現したのである。そして、彼等が得た特權——他の第三階級者をして彼等が貴族と協力してゐるとまで思はせた其關係——は事實に於て、舊社會勢力及王權から奪取して來るものであつた。Jaurès の言を引用すれば「彼等は、神權を有する王位や

封建的階級政治とは似てもつかも王位、新王位、黄金の王位を遠方から豫示したのである。」（註三）彼等は、王の宮庭生活によく慣れては居つたものの、其本體は依然として近世社會の嫡子であつた。彼等の中の優秀なる人々は、自らこの事を意識して居つたのである。

例之、大化學者であり且改革派であつた Lavoisier は收稅請負人であつた。彼は流行や狂氣じみた好奇心によつて科學に專心したのでは決してなかつた。彼は、物質の神祕な變化の理を探求するために、彼の職業から得た收入を費用のかゝるこの實驗に消費したのである。又、Dupin de Francueil 夫妻は、ルソーの學說に共鳴し、又世界平和の大空想家サン・ピエール伯のために彼の邸宅の門を開いた。彼の子息は邸內に工場を設けた。これは收稅請負人の巨大なる資本貯蓄が工業生產を養育したことを我々に首肯せしむるものでないだらうか。

故に、一歩讓つて、個人としても又階級としても、これら大資本家の好意が全然古代制度の側にあつたとしても、彼等は、事實の進行に於ては、その意思と反對に極めて平民的な市民を政治家たらしめ、自由の惑信者たらしめる有力な政治的煽動者の作用、媒介體の作用をしたのである。と我々は結論する事が出來る。

思ふに、社會生活に於ては、階級區別は決して純粹無雜のものではあり得ない。歷史的發展が階級鬪爭に歸せしめられる場合、よく人は、社會に相戰ふたゞ二つの陣營、二つの階級が存在する。二つの確然たる等質的大衆團體、革命的大衆團體と反革命的大衆團體とが存在すると考へ易い。「此の側とその側とのみが通用する」と考へ易い。若し事實に於てそれがそうであるならば、歷史を書くと云ふ事は甚だ容易な事柄であらう。然し、實際に於ては事實關係はしかく簡單ではない。社會は、事態の生成に應じてそれ自身を種々なる黨派へ結成し得るところの種々なる階級と種々なる利害とを持つ極めて複雜した組織體である。即ち、歷史の課程に於ける社會の諸勢力は Pharaon へ行く水の如く、確然たる二つの城壁によつて分離されて居らぬ。そこには必ず結合と交流がある。收稅請負人がその適例である。彼は「古代制度と新生の資本主義との交流點にある雜種から生れた一社會勢力として存在する。」從つて、革命は收稅請負人を古代制度に左袒するものとして處罰する事も出來たであらう。革命は Lavoisier を丁重に招待した後に、絞首臺にかける事も出來たであらう。然し、彼は歷史的に云へば、依然として一革命的勢力であつたのである。（註四）

セイエースは、これら全權階級が第三階級中に包含さるべき事を明白に認してゐる。即ち曰く「富裕なるために高等の敎育を受くる事が出來、其推理を陶冶し、公事に興味を感じうるが如き人々より成る階級を、多くの人々と同樣に、余は富裕階級と呼ぶ。」この階級こそ、國民の殘部の利益を以つて、その利益とするものである。この階級は、知識の點に於て、正直さの點に於て、又他のあらゆる點に於て、國民のよき代表者たるに應しい多數の人々を包含してゐると。

次に、其所屬を決定すべきものは新貴族であるが、之れに對するセイエースの答は明白なる否定であつた。

由來、フランスの貴族は他の階級と交る事をいさぎよしとは思つてゐなかつた。彼等はあらゆる點に於て優越を示すために注意を拂つた　先づ、彼等は公共的責務から免除を受ける事に成功した。

彼等はこの成功によつて得た特權を以つて、これこそ自己の地位を永く持續する所以だと考へた。我々にしても、この特權を一瞥した丈では少くともそう信じる。然るに、事實は全くこの豫期を裏切つた。彼等の優越を維持する事は、一面莫大な支出を必要とし、そのために彼等のこの特權が反つて、彼等の貧窮を增大するに至つたのである。そして、これと同時に、彼等が輕侮して居つた中產階級は、勞働するが故に、生產するが故に、遂に、彼等と相並び、剩へ、彼等を越えて富み且榮えた。一言にして云へば、フランスの平民は貴族が失つたものすべてを相續したのである。かくて新貴族は舊貴族と對立した。新貴族は、舊貴族と同じ服裝で、同じ態度を以つて、或はより美しい馬車に乘つて街上を濶步した。然し、舊貴族は彼等を快しとはしなかつた。舊貴族は殘された唯一の武器を以つて彼等から區別される事を求めた。そして、この最後の努力に成功した。セイエースの言を藉用すれば、舊貴族は、新貴族が所謂四百年間續いてゐる事を證明し得た場合に於てのみ同席を許した。この方法で舊貴族は、新貴族を第三階級の中へ追込まふと計つたのである。然し、第三階級は、これに對して圍牆を嚴にして彼等を入れなかつた。

新貴族にてあれ、舊貴族にてあれ、法律上貴族たることに相違はない筈である。凡ては一樣に特權を持つてゐるのである。俗見のみがこれを區別したがるに過ぎない。何故なれば、昨日貴族になつたばかりの人については、世人は貴族でなかつた一昨日の事をよく知つてゐるから。然し、貴族たる資格の成立が、過去の征服によらうと、昨日の敍位によらうと、或る公民が共通の權利に反する特權を獲得するや否や、その瞬間から最早通常の階級に屬してゐない事は確實である。新らたに獲得された特權は、彼等をして人民の階級に投票するに不適任な者たらしめる。

これが、第三階級の意見であつた。

新貴族を第三階級に加へんとするには、前記の俗見以外に、尙一つの論據があつた。それは、「最も見識ある、最も勇敢なる、最も尊敬すべき人々を除外する事によつて、好んで自己の階級を弱め樣とするも同樣である」と云ふ反對であつた。

これに對して、セイエースは、「勿論第三階級は自己の威嚴と力とを減ずるが如き事は希望しない。然し、眞理は飽くまで眞理たらしめるべきである。例へば、一軍隊にあつて、會ま、その最有力なる部隊が不幸にして敵に投降した場合に、尙且つ軍隊はその陣地の防禦を彼等の手に委する必要があるか。これを放任しておけば、彼等は第三階級を分裂せしめ、强いて、その運命をば敵手に委ねざるを得ざらしめる事がないとは誰れが保證するか」と反問し、「第三階級は自己を代表するに足る有識者と勇敢な人を有してゐない。從つて、貴族から知識的援助を求めなければならぬと云ふ樣な事を提唱して、余の論破せる所をば防禦し得たと信じた人々があつたが、この奇妙な主張は答へるに値しない」とまで極言してゐる。

思ふに、社會的存在としての金融家と新貴族には、左した徑庭はなかつたのであるが、十八世紀末のフランス第三階級が、特權に對する反抗を以つてその團體的連鎖として居つた以上、特權のない前者が第三階級の中に加算され、特權を享有する後者が第三階級から除かれたことは當然の結果と云ふべきであらう。

特權の廢止を要求する大多數の國民、これこそ、十八世紀末のフランスの第三階級の定義となるであらう。

註一　H. Taine, op. cit. p. 171.
註二　カツッキー著、前掲書、五五頁。
註三　J. Jaurès. op. cit. p. 58.
註四　J. Jaurès, op. cit, p. 55, カツッキー著、前掲書、五頁。

七　第三階級の特權排擊と要求

元へ筆を戻して貴族階級を批判しやう。

不具者、無能力者、治すべからざる怠惰者、甚だしき惡風を有する者と云ふ樣に、社會には、社會の勞務に貢献し得ない者が多數存在してゐる。

然し、彼等は社會に於ける例外である。原則は常に例外と濫用とを伴ふものであるから、多少の例外は承認しなければならぬが、少くとも、濫用と例外とが少なければ少ない程、其國家は秩序ある國家と考へられるといふことは何人も是認する所である。

我々は、かくの如く「活動せざる事を光榮とし、生産について貢献する所なく、生産物の最良の部分を消費するが如き存在」を、國民とは無關係な外國人と見做さざるを得ない。フランスの貴族は正しくこの條項に該當する外國人であつた。しかも、この外國人たるや、我々の領土の外に在籍する外國人に非ずして、驚くべし、「我々の中にある外國人」である。何故かなれば、貴族階級は、更に、私法上及公法上の特權を有してゐるからである。

これらの特權の中で、最も厭忌すべき免稅の特權をとつて考へて見るがいい。十五世紀以來フランス革命迄、租稅額は次第に增加して居つたのであるが、租稅の增加するに伴つて免稅の特典は愈其光彩を殖して行つた。タイユが、シャールル七世の時に百二十萬リーヴルに過ぎなかつた場合には、免稅資格なるものも些少の價値しか持たなかつた。然し、ルイ十六世に至つて、稅額が八百萬リーヴルに上つた時にはそれは可成の效果をもたらした。貴族の免除されてゐる稅が、タイユに止まる場合には、尙この特權は人の耳目をそばだてはしなかつたが、同樣な稅が、種々な形で、又種々な名稱の下に賦課された場合には、タイユと同樣の基礎の上に四つの租稅が賦課され、又一切の公共事業について賦役の如き、軍隊稅の如き新稅が、單に貴族のみを除いた他のあらゆる階級の上に賦課された場合には、第三階級は、異樣な眼差を以つて、この特權を凝視せざるを得なかつたのである。

こゝに於て、セイエースは「國民とは何ぞ」と反問してゐる。國民とは共通の法律の下に生活し、同一の立法機關によつて代表さるゝ結社員の團體である。

然るに、貴族階級は、自己の所有する特權によつて共通の法律から脫出して了つてゐる。從つて、彼等は、其私法上の權利によつて大なる國民とは別に一の人民を形成してゐるの狀態に居る。「正に、これ國家內に於ける國家である。」

貴族のこの專制は參政權に於ても同一である。彼等の有する代表者は、彼等のための代表者であ

つて、全然一般人民を代理しない。故に「若し、三民議會が總意を反映するものであり、又この資格に於て立法權を有つものであるとするならば、單に僧侶、貴族、法官の會議に過ぎないと云ふが如き三民議會は眞の貴族政治でなくて何であるか。」

モンテスキューは「法の精神」に於て、「君主政に於て、領主や僧侶や貴族や都市の特權を癈止すれば、やがて生ずるものは民衆的國家か專制國家であらう」と論じてゐる。(註一)今、反對に、それらの特權が强調された場合を想定するがいい。そこに生ずるものは、民衆國家でも專制國家でもなくて、貴族專制國家である。フランスはかゝる國家であつたのである。故に、フランスは君主制度の下にある國家だと考へるのは大なる誤謬でなければならない。事實が、この主張に一致するか否かは、歴史を繙けば明白になる。「我等の年代記から、ルイ十一世とリシュリューの數年及ルイ十四世のある時――この時には完全なる專制政治が行はれてゐた――を除いて見よ。然らば諸君は朝臣の貴族政治の歴史を讀むと云ふ感に打たれるであらう」とセイエースは云ふ。

大臣の職の新設も癈止も任免も、又、種々なる地位の新設とか分配も偏に朝臣の自由である。彼等は一種の交誼、又は馴合關係により、他の階級を除外し、彼等相互の間に尨大な貴族政治の網を張つたのである。換言すれば、國王が國民を治めたのでなくて、宮庭が國民を治めたのである。官廷が官位をつくり、任命をなして居つたのである。

貴族寡頭政治の首腦者は王でなくて、全く貴族であつた。

故に、セイエースは云ふ。されば人民も怨嗟の聲を放つに際し、君主と權力の原動力たる人々を常に區別してゐると。彼等は常に國王を目して「自己の名に於てなされた有ゆる害惡が、自己の責任にされたと考へた事もない程に、欺かれ切つた人であり、活動的な全能な朝臣の中にあつて、全然防護されてゐない人である」としてゐた。人民のこの感情を、一七八九年の六月二十七日に巴里で感得したArthur Youngも、其日の記錄に、人民の要求するものは王を有する一共和政治であつたとしるしてゐる。王を有する一共和政治とは我々に奇妙に響くが、之を換言すれば、眞正なる立憲政治と云ふ意味であつたのである。

セイエースは云ふ「以上を要約すれば次の如くなる。これ迄、第三階級は國會に眞の代表者を送つて居なかつた。從つて、其參政權は零である」と。この零なる狀態を充たす事こそ第三階級當面の問題であつた。

フランス革命史を繙く者はすべて、尙國民の勢望を擁して居つた王が、何故にこの機會を握らなかつたか疑ふであらう。我々は、これに對する王の行動については、同じくYoungの日記（六月二十七日）によつて、王は狩獵に出掛けたと答へ得るばかりである。何故に王は狩獵に出掛けたのか。外の理由はない、王は狩獵が好きだつたからである。

然し、フランス王政が危機にあつた日の王のこの行動に對して、私が今述べた事は、冗談ではないが、少くとも揶揄した意味である。事實は王に何等の定見がなかつた事によるのであつた。

然らば、ルイ十六世が實行し得なかつた程過激な要求を第三階級は提出して居つたかと云ふに、遺憾ながら、そうでなかつたのである。

彼等の要求する所は第三階級の完全なる國政參與であつたに過ぎない。

第三階級は、自己の眞の要求を、王國の大都市たる巴里がその政府に對して提出した實際の要求によつてのみ判斷せんことを希望した。個々の人々の要求によつて判斷される事を回避した。これは賢明な方法と云はねばならぬ。「巴里は小フランスである」と同時に「ブルジョア革命の首府、大運動の中心地」であつたからである。（註二）

その巴里の要求は、短的に云へば、「人民は何ものかでありたい」と云ふにあつた。

再分すれば、第一に、「人民は、眞の代表者、換言すれば、彼自身の階級から選出された代議士であつて、その希望の代辯者たるに適し、且つ彼の利益の防禦者たり得る者を三民議會に送りたいと云ふのである。」

代議士の選出については、新貴族は「貴族は我々を欲しないし、又我々の方では第三階級を欲しない。若し、我々が特殊な階級を作り得たとしたならば結構なのであるが、そうは出來ぬ。どうしたらよいか？　どうも、第三階級が貴族を代表者として選出すると云ふ惡風を維持する以外に道はない」と考へるだらう。

舊貴族も「我々は、我々の子供を庶民院へ送らう。そうすると、結局第三階級を代表すると云ふ任務を我々が負ふと云ふ考は名案に相違ない」と思ふであらう。だが、第三階級は、貴族のかゝる考を毅然として斥けねばならぬ。たとへ第三階級であつても、貴族及僧侶に餘り接觸しすぎる人を避ける程に、第一の原則を嚴重に履行しなければならぬ。然し、かゝる條件を具備した代議士を送り得たとしても、尙一つの危惧がある。何んとなれば、第三階級の利益に反する利益が三民議會を支配してゐるとするならば、折角の出席も無效である。無效である所が、反つて、其受けてゐる壓迫を神聖化することになるからである。

こゝに於て、第三階級は、此三民議會に於いて、特權者の勢力と少くとも同等の勢力を有つ事を許されざる以上、三民議會に參加すべからざる事は勿論である。第三階級は、他の二階級全體の代表者と同數の代表者を有つ事を要求する」と云ふ第二の要求が生れる。

代議士選出の割合決定標準は何んであるか。云ふ迄もなく、其土地の人口と稅額によるべきである。卑近の對照を擧げて見れば、廣大なポアトウーの裁判區は、狹少なジエクスの裁判區よりも多數の代表者を國會に送つてゐるが、これは、蓋し、ポアトウーの人口と租稅とがジエクスのそれよりも多いによるからである。

今、租稅額によつてその割合を決定しやうとするか？　之れと相並んで、人口によつて決定しやうとするか？　何れの場合に於ても、第三階級が、特權階級を凌駕してゐることは明白であつた。セイエースの計算によると、貴族僧侶の階級に屬する特權者總數は二十萬人である。此の數を第三階級の二千五百萬、乃至二千六百萬人に比較すれば、問題の解決は自ら定るものがあつた。此事は、フランスを發展課程に於いて考へれば、より一層明白になる。最後の三民議會以後に併合せられた新らしい諸州はどうなるか。此等の新らしい諸州は、一六一四年の當時に於て三民議會に出席しなかつたといふ理由から、其代表者を三民議會に選出してはならないと斷言しうるものは一人もある

ない。

同樣の事由は都市の發展についても云ひ得る。都市に於ける工業及技術の發展は、新らしき富、租稅、人民を發生せしめるものであるから、土地及人口の擴張されたのと同等に議員割當率の一素因とならねばならぬ。果して然らば、發展したる今日の都市も亦、一六一四年當時の代表者數によつて滿足しないのが寧ろ當然である。思ふに、權利の欠缺程大なる社會的欠缺はない。これを常に充す樣配慮する事が、政治の一大要諦である。

第三に、「各院別々に票決をなすものとするならば、此代表の平等は亦全く無意義に終るが故に、第三階級は其投票が階級別に採決されずして、人數によつて採決せらるべきこと」を要求した。この要求は第二の要求を確實ならしめるためのものである事は云ふ迄もない。

以上を綜合すれば、我々は第三階級の眞意が特權者と同等の權利を獲得するにあつたことを容易に推定出來る。眞實、これこそ彼等のなりうるものの中で最少なるもの、當時の事情としては實際的範圍を決して超越はしてゐなかつたのである。これ以下を要求したとするならば、それは、第三階級が其政治上の無能力狀態より脫して或物に成りうる望を有たぬ事を示すと同然である。

然るに、特權階級はこの要求にすら驚愕したのである。之れが達成を阻止するに努力を惜まなかつたことは勿論である。然し、かくの如く控目過ぎる程のこの第三階級の要求に對して、彼等が行つたあらゆる反對を、彼等が幾年かの後に回想する場合には、必ず其反對の口實が如何に淺薄であつたかに自ら驚くであらう。否、それよりも、彼等は、反對の口實を敢て見出さんとして、如何に大膽に且不平に振舞つたかを、今更の如く驚くであらう。

形勢は、今や、專ら特權者達の謬見によつて頗る切迫し、斷乎たる決心の下に、正義であり眞理である所の權利を極力主張せざるを得ない狀態にあつた。

註一　Montesquieu, L'Esprit des lois, Livre deuxième, chap. III.

註二　Jaurès, op. cit, p. 130.

八　第三階級の貴族化的傾向

併し、第三階級の團結については、尙一つの不安があつた。その原因は人間本來の性質より生ずる利己心であつた。利己心によつて、第三階級が不斷に貴族化する傾向を有して居つた事がそれである。

なべて人は、自己に利益をもたらす習慣の前には易々として屈服し勝である。又人々は不斷に自己の運命を改善しやうと考へてゐる。故に自己のなさんとする所を正面から堂々と押進める事の出來ぬ場合には、勢ひ、邪道に陷り易い。第三階級も個人的に云へば人である。彼等の中で最も有能な人々でさへ、恰も、次の間に侍る家來の如く絕えず主人の鼻息を覗つて、自分の享樂せんと欲する利益のためには、如何なる犧牲も、進んで拂ふ事を敢へて辭せぬとは誰が保證するだらうか。

この點に於ては、第三階級は、確かに、農夫より遙かに多くの危險に曝されて居つた。教養に於て、智識に於て、生活に於て、貴族と甚だしく類似共通點を有してゐる平民は、ややもすると貴族と同化する誘惑を受けがちであつた。

勿論、十八世紀末の貴族と平民との風儀には何等かの差違は存して居つた。然し、其眞底に於て、兩者が農民から一段高い階級利害を有して居つた事は確かである。彼等は思想を等しくし、又習慣、趣味、書籍及言葉を等しくして居つた。彼等の異なる點はたゞ權利に於いてのみであつた」（註一）

從つて、平民は、遠い農民よりも利害の近い貴族へ歩み寄つた。彼等は、屢々、好んで、貴族が所有して居つたと同樣の財産に金錢を投じた。彼等は、普通は都會に住んでゐたが、屢々田舍に土地を所有し、中には領地さへ所有してゐる者があつた。

市壁内に閉込められた富める市民は、其出身地である農圃に對して、次第に興味と感情を失つて行つた。そして、自ら見棄てた階級の苦痛や關係事項に無關心を裝つた。彼等は貴族が特權を求めるに熱心なる如く、貴族の特權に近い除外的權利を熱心に求めた。それは官職を購入する事によつて達成された。かくして。富裕なる市民の生涯の目的は官吏たる事に還元された。中産階級の官職欲は異常なものであつた。少額の資金が手に入るや否や、彼等はこれを商業に投ぜずに直ちに一つの官職に投資したのである。

モンテスキューは、官職賣買を評して、この賣買制度は君主國に於いては良制度であると云つてゐる。「君主政に於ては、官職が公の規律によつて賣買せられずとも、宮庭人の貧窮と貪慾とはやはり、それを賣買せしむるだろうから、偶然の方が君主の選擇よりも良き臣民を提供するだらう。終りに、富により榮進する方法は、勤勉を鼓吹し、それを維持する。（西班牙は怠惰である。そこではすべて官職はたゞ與へられる）而して、こは實に、この種の政體の極めて必要とする所である」（註二）

これが彼の意見である。

モンテスキューは屢々諷刺家となり、逆説を好んだ。この場合もそうである。勤勉の鼓吹は、勢ひ、勞働の尊重、富の增加、換言すれば、商工業の發展を伴ふ。これこそ第三階級勃興の原因である。開化した第三階級は必ずより高い社會地位を望んで、既存の特權階級に並立し、彼等に對し自然と尖つた階級意識に目覺める。官職の賣買は、結果に於て君主政を市民の手へ賣却する事になるではないだらうか。

然し、これは結果から見て、私がモンテスキューの言葉を逆説的に解した迄である。官職の購入によつて特權化する、第三階級の傾向から推定して、平民と農夫の間は平和であるべき筈はない。少くとも一致はしてゐなかつた。この利害の不調は、地域や生活習慣よりずつと廣い程度で、中流階級と農夫とを隔てる溝をつくつて居つた。

貴族の特權に關しては常に不平が投げられた。これは正當である。然し、農民は、中産階級の特權についても何等か云ふべきものを有して居つた筈なのである。當時、貴族僧侶以外に、政府の官職をうる事によつて、稅から或る免除を得て居つた住民を多く含まなかつた敎區は、どこを採しても見當らない程であつた。これに關して、Tocquvielle は「租稅免除は貴族の間と同樣に、又それ以上に中産階級の間に頻繁であつたことを余は疑はぬ」と云つてゐる。（註三）

ブルジョア階級は、かくの如く、地方稅の大部分を主として農民及下層階級に負擔せしめ、又常に村落及農圃を都市の利害の犧牲にして憚らぬ決意を有して居つたのである。

從つて、セイエースもこの不安を感じて次の如く述べてゐる。「貴族政治の最も勇敢なる擁護者は第三階級の内部に見出される。即ち、生來優秀なる才氣に恵まれてはゐるが、氣魄に乏しく、自由の價値の何たるかを知らず、又權門の愛撫と權力とに渴へてゐる第三階級の人々の中に見出されるのである」と。

以上述べた所は、第三階級の特權化的傾向であるが、他面に於て、正しくこれと反對の事實も存したのである。換言すれば、第三階級は、勇敢なる自己の代人を、自己の體内以外にも發見したのである。絶對的王政の決定的要素となり得なかつた中小貴族は、正義と人道の最初の擁護者として第三階級に合流したのである。

セイエースはこの援助に對して、第三階級は、他日自由になり得た時には必ずや、貴族僧侶中の愛國者に尊敬の念と感謝の心を捧げるであらうと云つてゐる。

要之、第三階級は、貴族化する要素と傾向と希望とを多分に有すると共に、下層階級、殊に農民とは、ともすれば利害對立の地位を占めがちであつたが、特權に對する平等、專制に對する自由に於ては前述した如く依然として革命的一大陣營となつて居つたのである。（註四）

註一　Tocquvielle, op. cit, p. 105.

註二　Montesquieu, op. cit, livres 5em, chap. 19.

註三　Tocquvielle, op. cit, p. 118.

註四　但し、こゝで問題になるのはこの農民である。革命をもつて、ブルジョア的意識によつて統合された第三階級（此場合には當然農民も農民としてではなく、都市のブルジョア同樣の意識を有する一階級として包含される）の革命と見れば問題はないが、農民をそこから引離して獨立した階級利害を有するものとして考へる場合には、ブルジョア階級の革命をフランス革命の積極的都市的表現と見ると同時に、農民の革命（或は一揆と云ふべきが至當かも知れぬ）をフランス革命の消極的農村的表現と見る事が出來やうと思へる。殊に當時のフランスは農業國であつたのであるから、今言つた樣な立場から革命に於ける農民の貢獻を或る點まで强調していいと思ふ。この點は農民を論ずる際にもつと考察して見やうと思ふ。

九　結　論

以上論述し來たつたところを綜合すれば、貴族僧侶、第三階級以外に、第四階級の存在をも認めたMaret の分類に反して、セイエースの定義するが如く、一七八九年には其要素には祕やかな雜種があつたにも拘らず、未だ一階級しか社會の表面に浮び上つてゐなかつた。

後には、革命が成熟するに從つて、そこから、第四階級が獨立分離するに至つたが、一七八九年には、正しく完全な一階級しか、即ち、階級意識に目醒めた第三階級しか存在しなかつたと見るのが至當であらう。

憲法的保障を要求し、尙、その實行に入つた町人階級、農民、及勞働者の合同勢力こそ第三階級と呼ばるべきであつた。

然り、一七八九年に於て、セイエースが、彼の大膽な計算によつて得た此の第三階級の途方もない合計の中に、町人階級、農民、勞働者を押込めるには、この三種類の集團が同質の仕事に對して

結合する事が必要であつたのである。故に若し、彼等がこの必要を認めないなら、若し、農民か、或は勞働者が、公債所有者に向つて、或は產業の指導者等に向つて、「如何なる權利によつて、我々と同樣の名稱を有する勞働力の中に卿等は自分等を加算するか」と抗議したとするならば、セイエースの莫大な革命的計算は一切無效になつて了つたであらう。

然し、古代制度の特權に對しては、公債を所有し、大資本を擁する町人階級すら、努力と活動と勞働とを代表し得たのである。かくして、生產階級のこの偉大にして恐るべき統一に於て、セイエースは第三階級の一切の要素を包含し、前述した如き定義を第三階級に與ふることが出來たのである。

この結果、「其精神運動に於ても、實際運動に於ても、其賴みとする所は、自己の智識と勇氣とのみであることを自覺した第三階級」、「條理と正義とを彼等の味方として、一切の力を自己に獲得するに努力した第三階級」は、彼等にとつては、其地位が改善されるか、又は從前通に止まるかは最早問題でない、事情はかゝる打算を許さない、進むか然らずんば退くか、不正にして且非社會的な特權を廢止するか、然らずんば之を認めるかと云ふ斷乎たる決心を以つて、彼等の壓迫者敢えて第三階級より分離せんとする言葉を宣言し、「王を威嚇し、人民を威嚇する」僧侶貴族に對抗したのである。一七八九年六月四日から六月二十三日に至る間の日日は遂に第三階級に勝利をもたらした。第三階級は代表者が二十萬の貴族又は僧侶を除く全國民中、二千五百萬乃至は二千六百萬人を代表してゐる事實は、遂に、第三階級をして國民議會を構成するものであると自稱せしめ、且貴族がこれを承認するを餘儀なき事としたのである。そして、この國民議會こそは、市民の身分上の階級は何等問題でなく市民の財產及物質上の等級のみが問題である、人々は所有者としてこの種の議會に召集されるのであつて、僧侶、貴族、平民の資格に於て召集されたのではないと云ふ第三階級の觀念の具體的表現であつた。

Mignet は云ふフランス革命は國民議會より初まると。ブルジョア階級が希望の焦點として居つたこの國民議會はやがてフランスの運命を決定すべき修羅場とならねばならなかつたのである。

セイエースは云ふ、「第三階級とは何か」、「すべてである」と我々は、再に問ひ且つ答ふる事が出來る。

「フランス革命とは何か」曰く「第三階級である」と。（註一）

註一　但し、こゝの第三階級と云ふ意味は、ブルジョア階級のみならず、ブルジョア階級的意欲を有するものすべてを含んだ廣い意味である。（四、三、三）